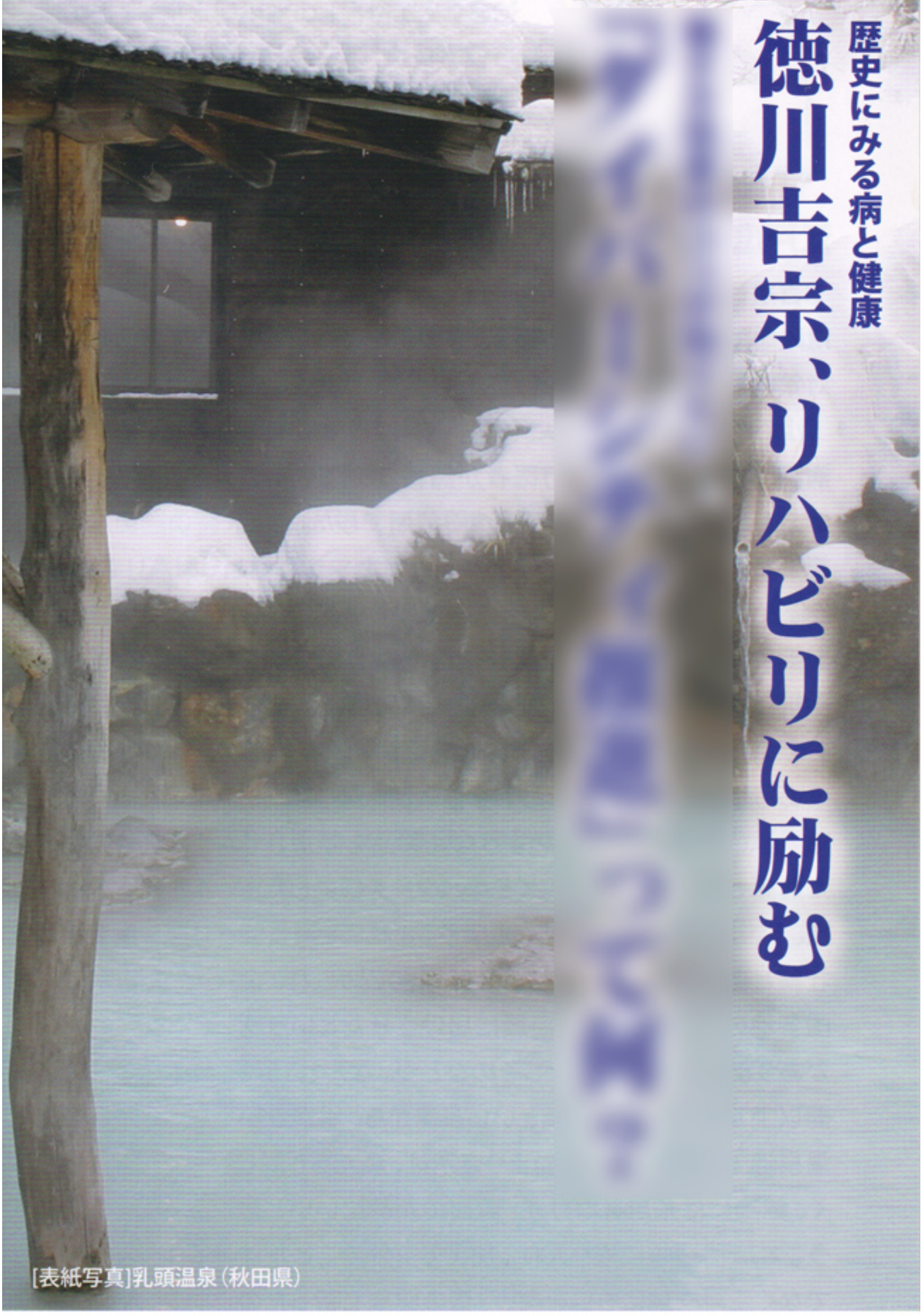
法人会情報通信
No.82

はつらつタイム

歴史にみる病と健康

徳川吉宗、リハビリに励む



[表紙写真]乳頭温泉（秋田県）

歴史にみる病と健康

徳川吉宗、リハビリに励む

植田美津恵

医学ジャーナリスト・医学博士
愛知医科大学客員教授・東京通信大学准教授
専門は公衆衛生学・医療安全・心理学・医療制度など幅広い。各大学で教壇に立つほか、医学番組の監修、テレビコメンテーター、講演活動をこなす。医学博士(愛知医大)、社会科学修士(東洋英和女学院大学大学院)。日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事、厚生労働省研究班委員、経済産業省委員会座長など。
「いつか来るはじめての死～今をより良く生きるために～」(単著)、「戦国武将の健康術」(単著)、「忍者ダイエット」(単著)。「わたしのカラダを医学して!」(萌系医学解説本・監修)など著書多数。

260年あまりにわたる江戸時代の15名の将軍の中で、これほど現代人に親しまれた人はいないのはないでしょうか。

その人の名は徳川吉宗。紀州徳川家の4男坊でありながら、33歳のときにまさかの第8代将軍に就任、「暴れん坊将軍」としてテレビドラマにも頻繁に取り上げられるほどの人気将軍です。実は、その経歴や豪放磊落な人柄の他、健康ネタでこれほど話題に事欠かない人もありません。

江戸庶民の健康願った吉宗

吉宗といえば「享保の改革」。破たん寸前の幕府財政を再建したことで知られますが、同時に下層民対策として設置したのが、赤ひげ先生で知られる「小石川養生所」です。これが、いわば日本最初の病院で、幕府の医師や町医者が無料で診察や薬の処方を行ったという伝説を持つ診療所でした。医は算術ではなく、仁術といわれるゆえんです。

そのほか、薬園を開き、吉宗みずから薬を調合、家臣や一般庶民に与えた話も有名です。自分で薬を手掛けるとは、神君である徳川家康を彷彿とさせるものがあり、名君と称されるのも納得ができます。

あるいは、インドから乳牛を輸入、安房の国（千葉県）で放牧し、バターのような乳製品を献上させた逸話も残ります。おそらくそのバターを口にした吉宗、すこぶる快適だったのでしょう。これこそ滋養強壮薬と喜んだとか。さらに、温泉好きで知られ、全国各地の温泉の湯を江戸城に届けさせたという話があります。熱海の温泉もそのひとつ。なんと15時間以上かかって運ばせたといいますから、半端ない温泉通でもありました。つまり吉宗は、私たちと同じく、健康には糸目をつけず、健康のためにいいと思うことは積極的に取り入れ、加えて自分のことだけでなく江戸庶民にも目を向け、皆の健康を祈ったのでした。

63歳で脳卒中に

ところが、頑強な吉宗も病気には勝てません。63歳のときに中風で倒れ、半身マヒと言語障害を持つ身となります。中風という病気は、今でいう脳卒中のこと。日本では中世からよく知られている病です。突然、風が身体の中を吹き抜けたかのように人々を襲い、その後意識を失くして倒れこむところから付けられた名前だといわれます。予期せぬ発作に一番驚いたのは吉宗本人だったのかもしれません。

そんな吉宗をささえる周囲の努力は並大抵ではありませんでした。「吉宗公御一代記」によると、吉宗の主なリハビリは歩行とマッサージ。「大御所様がお歩きになるときには、大御所様の右側に寄り添い左手で帯をつかんで右手で大御所様の動かない右手を捧げ持ち 一緒に歩く」とする家臣の姿があり、さらにはマヒした腕のマッサージを日々欠かさぬ家臣。ある日、だらりと下がった吉宗の腕が、自らの力でゆっくりと動いたとき、「大御所様は非常にお喜びになって私（家臣）も感激のあまりむせび泣いた」と記録されています。リハビリは早ければ早いほど効果があるといわれますが、それと同時に根気と周囲のサポートが欠かせません。吉宗は、早く元のからだに戻って鷹狩をしたいと願っており、その思いを家臣たちも感じ取っていたといわれます。

病を得てなお、夢や希望を忘れない。できるようでなかなかできないことをやり遂げた吉宗は、やはりただ者ではなかったのだと思えてなりません。

お勧め書籍：大石慎三郎著「徳川吉宗と江戸の改革」（講談社学術文庫）1995年